

Title	「第二回東日本大震災国際神学シンポジウム」報告 前置き
Author(s)	藤原, 淳賀
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 45-49
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4944
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

「第二回東日本大震災国際神学シンポジウム」報告 前書き

藤原 淳 賀（聖学院大学教授）

東日本大震災国際神学シンポジウム実行委員会

昨年度に引き続き、二〇一三年三月二七日、フラー神学大学院と共に、「第二回東日本大震災国際神学シンポジウム」をお茶の水クリスチャン・センターにおいて開催した。今回のテーマは「苦難に寄り添い前に向かう教会（The Church: Embracing the Sufferers, Moving Forward）」とした。大震災を経験し、苦難の中にある人々に寄り添い、しかしそこに留まることなく共に前に進んでいく神の民の思いと必要性から出てきたものである。聖学院大学総合研究所、東京基督教大学（TCU）と共に主催団体である東日本大震災救援キリスト者連絡会（DRCnet）は、特に、現地の方々と密接に歩んでおり必要をよく理解していた。第一回目のシンポジウムを終え、四カ月をかけて、被災地の現状や声を考慮に入れながら、この時期に必要なテーマとして実行委員会で決めていった。前回と同じく、学者のための抽象的な義論の場ではなく、一般の信徒が理解できる言葉で、諸教会・諸団体が実際の働きを進めていく中で助けとなるような議論を、しかし神学的にきちんとしたかたちで、行うことを意図した。日本のキリスト教における大きな問題の一つとして、聖書研究を行い難解な神学書さえも読むが、神を愛し隣人を愛し人や社会や教会に手足を動かし奉仕を通して仕えるという実践を軽んじることがある。またもう一つの問題として、神の御言葉と宣教を重んじることなく、社会

活動に終始するということがある。しかし、キリスト教社会倫理は、本来、実践と共にある神学研究である。シンポジウムではそのようなラインを重視してきた。

フラー神学大学院とは三年間シンポジウムを行い、今後のことはそれを評価した後に決めるという約束をしていた。第一回シンポジウムのテーマ「いかにしてもう一度立ち上がるか——これからの二〇〇年を見据えて (How can we start again? Centurial Vision for Post-disaster Japan)」は三年間の共通テーマとした。

昨年にも増して大変に素晴らしいシンポジウムとなったことを報告できるのは大いなる喜びである。

今回のシンポジウムの特徴として、様々な意味で広がりが生まれてきたことがあげられる。

大震災の中で、人々は助け合った。またキリスト者も、様々な教派・教団等の壁を越えて、今まで顔を合わせることもなかった方々が自然に一緒に奉仕した。そしてキリスト教人口一%のこの国にあって、九九%の人々の目に、自分たちは「キリストさん」あるいは「クリスチャン」として映っており、自らの伝統・立場を大切にしつつも、できることは一緒にしたほうがよいと考えられるようになった。このような暖かく溢れる流れは、何もせずに放っておくと、冷めて元通りの壁の中に戻っていつてしまう。これは意識的に支えていかなければならない流れである。そのような暖かい神の民としての意識を今回のシンポジウムに反映させることができたことをとても嬉しく思っている。

今回のシンポジウムには、まず第一に教派的な広がりがあった。第一回シンポジウムは既に主流派のキリスト教（聖学院大学）と福音派のキリスト教（東京基督教大学）が一緒に、広い意味での日本の宣教のために、DRcnetと共に主催した。アメリカのフラー神学大学院が最初に声をかけてくださり、また脇から支え、共催となつてくださったことは前回の報告書に記したとおりである。そして二九の諸団体に支えられて行うことができた。

それをカトリック福岡司教の宮原良治先生が聞かれて、私に連絡をくださった。第一回シンポジウムの講演集をお送りしたところ、講演の内容に感銘を受けた、また企画にも感動した、との手書きの手紙を献金と共に送ってくださった。私はこの心のこもった手紙に深く心を動かされ、すぐにお返事を書いた。実行委員会の承認のもと、カトリック教会からもシンポジウムに出席をお願いすることになった。宮原先生がバチカンを訪問する際に東京でお会いした。カトリック教会から幸田和生先生（カリタスジャパン担当司教）がパネルでご発表くださったことに感謝している。

第二に、内容において多様であった。前回は五つの講演を柱としたが、今回は、主題講演以外に、四人の発表によるパネルディスカッション、一一の分科会、全体会があり、その後礼拝をもって会を閉じた。

フラー神学大学院のリチャード・J・マオ学長をメイン・スピーカーとしてお招きした。『神の忍耐の時』の中で、苦難の救い主に仕える (Serving a Suffering Savior in "the Time of God's Patience") という題で語ってくださった。マオ先生の『アブラハム・カイパー入門』の邦訳者である岩田三枝子先生（東京基督教大学講師）が翻訳を担当してくださった。

パネルでは、伊藤悟先生（青山学院大学教授）と岡村直樹先生（東京基督教大学教授）がキリスト教大学の立場から、学生たちと共に震災支援に関わってきた経験を通してご発題くださった。幸田和生先生はカトリックのカリタスジャパンの支援の働きを通しての重要な視点と情報を提供くださった。ディスカッションの中の、現地で「もつと福音が語られなければならないと思います」という言葉を筆者は深く受け止めた。プロテスタントのキリスト者の中にはカトリック司教の先生が語られるのを初めて聞いたという人も多かったと思う。藤掛明先生（聖学院大学准教授）は、パース・ドリブン・フェローシップ・ジャパン等と共に被災地に何度も足を運びセミナーや心のケアを行ってこられた経験から、コラージュ療法で現地の方々が作られた作品も画像で提示しながら、心理臨床家の立場から発題をしてくださった。

今回は一一の分科会を持つことができた申し上げたが、これは定期的に持つてきた、協賛・講演団体の代表者会で出てきた問題意識を反映したものである。プロテスタント、カトリックだけでなくハリストス正教会の宣教と歴史、原子力発電所とフクシマの問題、傷ついた心のケア、被災地の子どもたちの支援、震災で亡くなられた方々の大多数であるキリスト教徒でない方々の弔いに教会としていかに参与するか、震災直後から活躍した自衛隊と国家的危機の時期に起こる国民統合の問題、青年たちの働き、また今後もし起こるであろう震災への対応、また教派・教団を越えた働きについて、発表と対話の時が持たれた。

特にわれわれの深い関心事である教派・教団を越えた働きについては、川上直哉先生（東北ヘルプ事務局長）が、全体会で、どのようなことを行うことができ、またできなかったのかについて語ってくださいました。

礼拝では、東野尚志先生（日本基督教団聖学院大学教会牧師）が、イザヤ六四・一―四から「嘆きの心に賛美の衣をまとって」という題で大震災への対応と受難週を念頭に置きつつ説教を語ってくださいました。

このように今回のシンポジウムには内容的に豊かな多様性があり、今後の発展に繋がる可能性を示唆することができた。また多くの人々が主体的に関わり、自らの問題点を皆と分かち合いつつ作り上げていくことができた。

第三に、今回は前回以上に交わりを重んじた。第一回シンポジウムの際も、会の後で、協賛・後援の諸団体の代表者の方々の立食の席を設けた。「顔が見える信頼関係」をキリスト教界の中で作り、できる事は一緒にし、一緒にできなくても互いに敬意を持つて注意を払うようなエートスを作り上げていくことが、この大震災の直後に生かされている神の民の責任だと考えたからである。初めて顔を合わせる方々も多く、どのような震災支援を行っているかの報告でほとんどの時間を用いざるを得なかったのだが、そこから協賛・後援諸団体の「代表者会」が生まれ、今回の多様な内容の、また多くの方々の参加に繋がった。

今回はパネルディスカッション後に、約八〇名の方々をお招きし、豊かな昼食の交わりを持つことができた。またそ

の場では日本基督教団総会副議長の伊藤瑞男先生がご挨拶をくださった。今まで会ったこともなかった神の民が、大震災で痛んだ人々を覚え、神に応答し、共に祈り、共に論じ、共に賛美し、一緒に食卓を囲むことはとても大切なことだと考えている。この準備を手配してくださったのはお茶の水クリスチャン・センター（OCC）理事長の榎原寛先生である。当日はフラー神学大学院の同窓会を朝八時からシンポジウムの会場の一室で行うことになり、榎原先生は朝六時から会場入りし、自ら食事の搬入を手伝ってくださり、全ての面において大変な便宜を図ってくださった。OCCのスタッフの方々にも会場作り、音響、奏楽、その他で大変にお世話になった。

また会の全てにおいて通訳の奉仕をくださったのはブライアン・バード先生（聖学院大学総合研究所）であったことも感謝と共に記しておきたい。

前回と同様、フラー神学大学院はマオ学長を手弁当で送り出してくださった。日本側の発題者も基本的に皆、手弁当でボランティアとしてこの働きにに応じてくださったことに深く感謝している。

実行委員会は皆、東日本大震災後の今のこの時期に、どのように神に応答し、諸教会に、諸団体に、また様々な人々にお仕えすべきかという思いでこの会を準備してきた。皆様の尊いご協力に深く感謝している。

（肩書きは第二回東日本大震災国際神学シンポジウム当時）